

日欧商事株式会社

PCサーバーからPower Systemsへ移行 SOFLA iで基幹システムを全面再構築

- POINT**
- 旧・基幹システムが陳腐化し、再構築を検討
 - PCサーバーからPower Systemsへ移行
 - SOFLA iを導入し、自社開発を選択

COMPANY PROFILE

日欧商事株式会社
創立：1981年
本社：東京都港区
資本金：9900万円
売上高：54億円(2008年12月)
従業員数：91名
<http://www.jetlc.co.jp/>

旧・基幹システムに対し 3つの選択肢

イタリアのワイン・食材の輸入販売で市場をリードする日欧商事株式会社(以下、JET)は、現在PCサーバーからPower Systems (IBM i 6.1)への移行作業中である。切り替えの理由は、1997年に導入したPCサーバー上の基幹システム(MAPPERで開発)が陳腐化したのに加え、新しい業務要件が浮上してきたためである。Power Systemsへの移行により、PCサーバ

ー上での再構築よりも高度な機能を容易に実現でき、しかも中長期的にはコストダウンを図れると判断したからだ。

ただし、この結論に至るまでには「3つの選択肢があった」と今回のプロジェクトを担当する高島宏彦氏(業務・経理部課長)は言う。(1)PCサーバーの継続利用とMAPPER技術者の派遣による改築、(2)別プラットフォームの導入と外注中心の開発、(3)別プラットフォームの導入と自社開発、の3つである。

「結局、私と協力者の1人がRPGで開発した経験を持っていたことが決め手となり、Power Systems上での自社開発を選択しました。開発ツールには、RPGの知識だけで高度なGUIシステムを構築できるアイ・シー・アールのSOFLA iを採用しました」(高島氏)

JETは、元・日本オリベッティ社長のルチアーノ・コーヘン氏が設立した会社で、現在は子息のティエリー・コーヘン氏が代表を務める。イタリアと太いパイプを持ち、以前は高級レストラン向けワインと業務用食材の提供に事業を絞っていたが、その後ワイン市場の拡大とイタリア産食材に対する一般の関心の高まりに伴い、小売分野を拡充してきた。現在は小売分野が売上の35%を占める。

多様な課題が山積 ツール導入による自社開発へ

こうした市場環境や業容変化への対応が、目下進行中の基幹再構築プロジェクトの目的である。取り組み課題は複数あった。

1つ目は、倉庫での手作業に頼っている食材の賞味期限管理のシステム化である。小売向けでは、食の安全と品質に対する要望が最近急速に高まっており、厳密な賞味期限管理が必須となっている。例えば、「賞味期限までの日数がしきい値を超えたものは出荷しない」「以前出荷した商品の賞味期限よりも古い賞味期限の商品は出荷しない」などである。新システムでは、賞味期限を属性として持たせた商品の入荷から在庫、出荷までをシステム上でトレースすることにより、管理の徹底を目指している。

2つ目は、これも手動で対応している商品予約管理のシステム化である。レア物やプレミアム商品に対しては、取引先から予約が入ることが多い。最近この件数が急増し手動での対応に無理が生じてきたのと、在庫照会時に予約数量を確認できないためシステム化を決めた。

3つ目は、見積システムの完全シス



高島 宏彦氏
業務・経理部
課長

テム化である。現行システムでは、売上を入力すると一部の顧客と商品については仕切単価が自動表示される仕組みになっているが、それ以外は、営業担当者がExcelで作成した見積書(紙)を受注センターのオペレーターが確認し手入力する方法を取っている。そのため入力ミスや二重入力などの非効率さが目立っていた。改築するシステムでは、見積システムに営業担当者が直接入力し、システム上でデータが回っていく仕組みにする予定だ。

4つ目は、これもExcelベースで行われている輸入発注業務のシステム化である。現在は、担当者が販売実績や在庫状況などをいちいち確認して発注書をまとめている。新システムでは、各種データを1画面上で参照できるようにし、発注シミュレーションなども行いながら、システム上で発注業務を一貫処理できるようにする計画だ。「今後はデータを集約して参照できるので、経験と勘だけに頼るのではない発注が行える」と高島氏は語る。

5つ目は、日本加工食品卸協会の「日食協フォーマット」に対応したEDIシステムの導入である。既にJCA手順に準拠したEDIは導入済みだが、取引先からの要望の大きい日食協フォーマットに対応する。

300本のプログラムを順次開発中

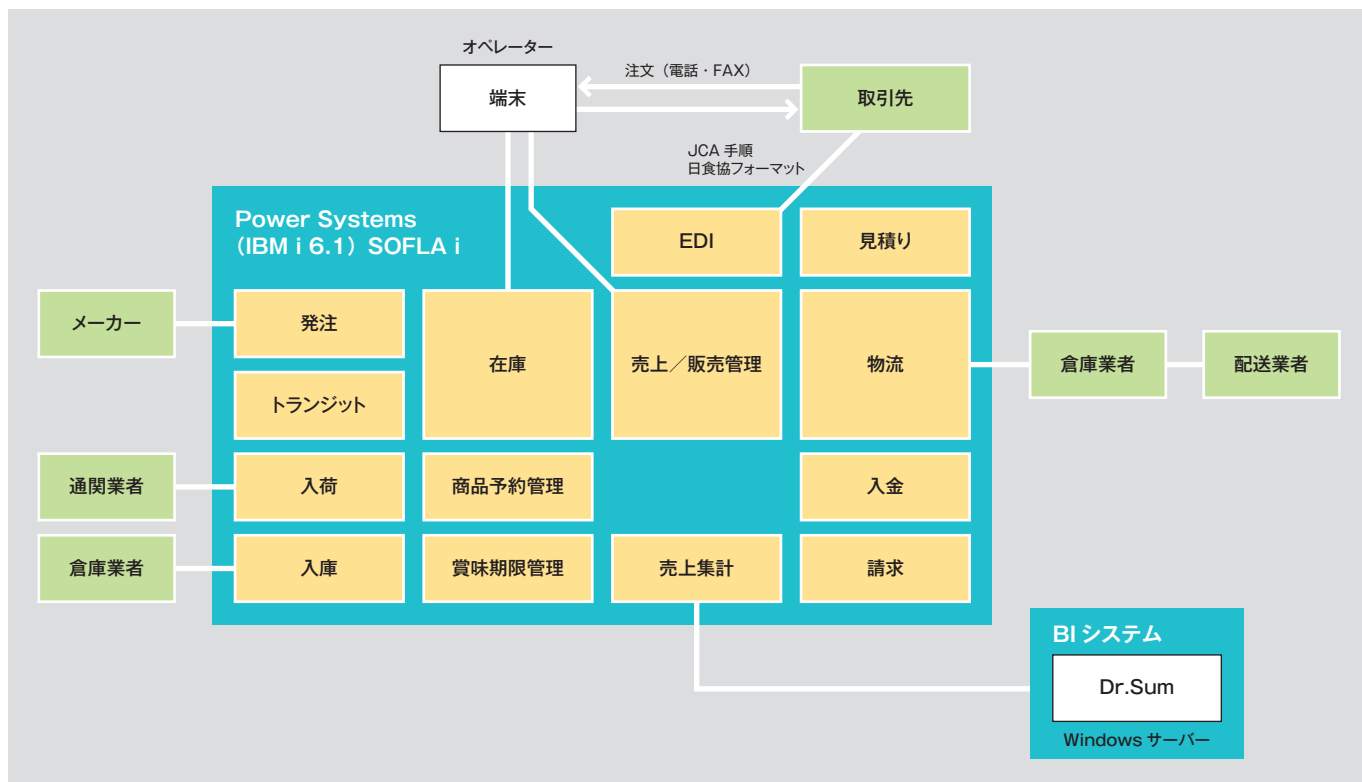
開発するプログラム本数は、約300本。2009年8月よりSOFLA iを使った開発が始まっている。SOFLA iについて高島氏は、「導入当初に2日間のトレーニングを受けただけで開発をスタートさせた。最初は、提供されたサンプルコードを参照しながらの開発だったが、現在はスムーズに作業が進んでいる。RPG技術者にとっては他の言語を覚える必要がないため、GUIを駆使した高度なシステムの開発がまったく違和感なく行っている」と感想を語る。

また現在、別のPCサーバー上でOracleとDr.Sum(ウイングアークテ

クノロジーズ)によるBIシステムを運用中だが、基幹システムからOracleへの日次バッチ転送に長時間かかっているため日常業務に支障が出ている。新システムでは、Oracleを撤去し、SOFLA iが作成したDr.Sum用データを、Dr.SumがODBC経由で取りに行き処理する仕組みにする。「この方式であれば1時間弱で転送できる見込みなので、分析・提案などの作業効率は大きく改善するはず」と高島氏は言う。

新システムがスタートすると、同社の業務運用は大きく変わる。経営トップが要求する、保管費や作業費、運送費、プロモーション費などを反映した商品ごとの損益管理がリアルタイムに参照できるようになる。また、取引先から要望の高い、商品ごとの出荷実績などもタイムリーに提供可能になる。

新システムのサービスインは、2011年1月の予定。約8カ月を残して、ほぼ予定通りにスケジュールをこなしている。サービスイン後は、予算管理システムの構築を決めている。①



図表 日欧商事が構築を予定している新基幹システム